

体育系学生のキャリア・トランジションと英語学修 [1]:
パイロット調査による初年次の実態把握
Students' Career Transitions and English Learning in College
of Sports Sciences [1]: Analysis of Pilot Survey for Freshmen

梅下 新介^{(1)*1}, 中村 文紀^{(2)*2}, 高橋 亮輔⁽²⁾
田中 竹史⁽¹⁾, 秋葉 倫史⁽¹⁾, 西川 大輔⁽¹⁾

Shinsuke UMESHITA, Fuminori NAKAMURA, Ryosuke TAKAHASHI,
Takeshi TANAKA, Tomofumi AKIHA and Daisuke NISHIKAWA

(1) 日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科

(2) 日本大学理工学部一般教育教室

College of Sports Sciences, Nihon University

College of Science and Technology, Nihon University

キーワード：キャリア・トランジション，体育系学生，初年次，英語学修

Keywords : Career Transition, Sports Student, First-Year Experience, English Learning

1. 緒言

2020年の東京オリンピックを控え、国内ではこれまで以上にスポーツへの関心が高まっている。文部科学省ならびにスポーツ庁では、「国際競技力の向上」の旗印の下、トップアスリートの育成や強化を積極的に推進しており、ハイパフォーマンスセンターの機能強化として、2019年6月にはナショナルトレーニングセンターの拡充棟が完成し、スポーツ・インテリジェンスセンター、スポーツ技術・開発センター、アスリート・データセンターという3つのセンター（それぞれ仮称）の整備に向けても準備が進んでいるところである。

ここで言及されている「国際」とは、世界各国のトップアスリートが集う状況を指している

が、そのような場では、競技の内外を問わず、言語を媒介としたコミュニケーション活動を避けて通ることはできない。室伏(2016)も述べているように、「競技によって英語や外国語の必要度は異なるが、多くの競技では、国際的な大会や選手の往来が多くなっており、英語での接触の機会が多くなっている」のである。

昨今、競技者のパフォーマンス向上を目的としてメンタルトレーニング(MT)の導入が積極的に行われている。広義のMTは「スポーツ選手の心理的・行動的・社会的不適応問題の予防策や解決策としての役割」を果たし、「選手の自己実現や社会性を促進させることなどを目的としている」と定義される(煙山ら, 2009)。すなわち、表面的には競技に直接の関係を示さな

* 1 日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科 (〒154-8513 東京都世田谷区下馬 3-34-1)

College of sports sciences, Nihon University (3-34-1 Shimouma, Setagaya-ku, Tokyo 154-8513, Japan)

* 2 日本大学理工学部一般教育教室 (〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1)

College of Science and Technology, Nihon University (7-24-1 Narashinodai, Funabashi-city, Chiba 274-8501, Japan)

いようにみえる周縁的な要因であっても、パフォーマンスに影響を及ぼす可能性があるという前提にたっている。このことから、合宿や大会で海外に遠征するアスリートにとって、英語を通じたコミュニケーション上の不安やトラブルが、競技パフォーマンスに影響を及ぼす可能性も否定できない。このような背景から、日本陸上競技連盟は、中・長期的に育成するエリート競技者である「ダイヤモンドアスリート」の研修において2015年10月より英会話のプログラムを導入している。

また、昨今は、Major League Baseball や National Basketball Association など、アメリカをはじめとする英語圏のチームで活躍する日本人も多く、チームスポーツにおいて、選手同士の円滑なコミュニケーションは必要不可欠であるが、プレーの最中にその都度通訳を介することは事実上不可能であり、英語力の有無は、選手としてのパフォーマンスにも大きな影響を及ぼすこととなる。

このように、アスリートとしてのレベルが上がれば上がるほど、英語を使う必要性も高まると考えられる。しかし、競技者として活躍する学生アスリートにとって、英語は重要な科目やスキルとして位置づけられているのであろうか。加えて、競技者としては第一線から退いたものの、マネージャーやトレーナー、アナリストのようにスポーツを外から支援したい、あるいはコミュニケーションの手段としてスポーツの普及に携わりたいといった動機から入学したその他の体育系学生にとって、英語学修の意識はどのようなものとなっているであろうか。

体育系学生への英語教育に関する先行研究としては、筆者らが知る限り国内で初めて論じた田中(1985)以降、スポーツ競技を題材とした教材作成を行った Elmes (2015)、アンケートの詳細な分析結果に基づいて学修の動機を解明した上で効果的な授業の特性を検討した望月ら(2019)など、教育手法の開発を目的とした好論が目立つ。しかし、これらの研究では、学生の競技者としての段階や競技との関わり方、卒業

後のキャリアの志向などの要因は考慮されていない。また、先行研究においては、アンケート調査を中心とする主観的な指標による分析が主体となっているが、英語の学力を考える上では、客観指標もあわせて考慮することが不可欠である。

そこで、本研究では、学年の推移、特にキャリアへの意識の変遷である「キャリア・トランジション」を主な因子とし、体育系学生の英語学修や英語に対する意識について分析することを目的とする。その際、対象学生が一律に受験している外部試験のスコアを客観指標として参照し、学力層や学力特性との関係性もふまえて考察を行う。その第一報である本稿では、初年次の学生を対象としたパイロット調査の結果を提示する。

2. 方法

2.1. 対象

本研究では、東京都内に位置する私立大学の体育系学部在籍する全学生を対象とし、アンケート調査を行った。パイロット研究である本稿では、そのうち、2019年10月25日の調査開始から10日以内に回答した1年生103名を分析の対象とし、その集計データを中心に検討を行った。

1年生のみを対象としたのは、初年次の実態把握を適切に行い、学年ごとの特性を順次追っていくことで、キャリア・トランジションとの関係性は理解が容易になるからである。ここで想定される学年ごとの特性とは、今回のアンケートにおける4学年の学年間の比較・検討にとどまるものではない。教員として教壇に立てば、その学年ごとの特徴や特性、従前の学年との差異を感じることはしばしばだが、次年度以降もアンケート調査を継続することで同一の学生・学年を追跡し、時系列を考慮しながら推移を検討することが可能となる。

2.2. 調査項目及び方法

2.2.1. アンケート調査

アンケート調査の媒体としては Google Form (当該大学で提供されているアカウントによるログイン者に限定) を利用し、表 1 のように項目を設定した。

[A] では、学年や性別といった基礎情報の他、学修経験との関連性が窺える入試区分の選択肢を設けた。[B] では、競技の名称や大学での活動区分 (競技部やサークル等の区分)、これまでの競技歴や競技レベル (国際大会、全国大会、ブロック大会、都道府県大会および上記以外の 5 択)、国際大会への出場経験、卒業後の競技継続の意思等、競技そのものとの関係性や向き合い方についてたずねた。[C] では英語そのものへの意識を調査すべく、英語の 4 技能への順位づけや学修の必要性、競技や競技内外での英語の使用状況や理解度、留学経験や英語でコミュニケーションをとる友人の数について回答を求め、あわせて、大学での英語の授業についての満足度や期待する学修テーマについて問うた。[D] では、キャリアとの関係性について検討する上で必要な卒業後の希望進路、および就職活動や卒業後のキャリアにおける英語の必要性や学修への意識について項目を設けた。[E] では、学力の客観指標を参照する上での参考として、外部英語試験の受験経験や取得した級やスコア、試験そのものへの認知度 (級やスコアの入力欄に、「試験そのものを知らない」場合の回答を求

めた) について調査を行った。

本稿では、以下 (考察で言及する順に詳述) の項目を中心に、単独集計またはクロス集計を行い、考察する。

[C] に含まれる 4 技能の順位については Listening, Speaking, Reading, Writing の 4 技能について、それぞれ何番目に重要であるかをたずねた。最も重視している技能を集計し、あわせて体育系学部の特徴を検討する手がかりとして理工系学部で実施した簡易調査の結果を参照した。この簡易調査の対象は、2019 年 11 月 2 日に実施した課外授業の全参加者である。また、各技能を点数化し、最も重要である項目を 4 点、最も重要でない項目を 1 点としてそれぞれ 4 段階で置換することで、各技能の平均順位を求めた。ここでも理工系学部を参照しており、値が 4 に近いほど重要度が高いこととなる。

また、海外の友人の数については、英語のコミュニケーション (特にオーラル) への関心を検討するにあたり、英語でコミュニケーションをとる友人の数を 5 件法で回答を求めた。集計結果は、同様に理工系学部で行った参考調査 (Google Form で実施し、先述の簡易調査とは対象が異なる) を参照した。なお、競技部に所属するいわゆる学生アスリートは海外遠征等で英語話者に触れる機会も多くあると推察され、このことが体育系学部全体の数値に与える影響を検討するために、競技部以外の学生のみを集計結果を別途示した。

表 1. アンケート項目と設問数

| 項目 | 内容 | 設問数 |
|-----|---------------------|-----|
| [A] | 回答者の基礎情報 | 5 |
| [B] | 競技および所属団体に関する情報や実績 | 13 |
| [C] | 英語のスキルおよび競技と英語との関連性 | 37 |
| [D] | キャリア形成と英語との関連性 | 3 |
| [E] | 外部英語試験の受験状況 | 9 |

大学の授業で取り上げるべきスキルと授業内容については大学の授業への動機や願望を探るべく、4技能や文法・語彙といった基本的な学修内容に加え、プレゼンテーション、体育系の専門に関わるテーマ、TOEIC対策・留学対策を列挙し、授業で取り上げるべきと考える項目について問うた（複数回答可）。昨今は、多くの大学・学部で習熟度別のクラス編成を行っており、当該学部も例に漏れないが、学生の学力は、授業に求めるニーズにも少なからず影響する。そこで、後述するCASECによる2つの階層（上位層・下位層）を参照し、客観基準を導入した上で分析を行った。

[D]に含まれる卒業後の志望キャリアと英語の修得意志では、大学卒業後（大学卒業後に専門学校等に通う場合はその卒業後）に志望する進路を6項目に分類し、学部全体の集計結果だけでなく、所属する競技団体の区分や性別も参照して分析を行った。また、就職活動や進学準備に向けて、英語を身につけたいと考えているかをあわせて問い、志望するキャリア別に集計した。

2.2.2. 外部試験スコアによる階層区分

本研究では、アンケート調査による主観データを主たる分析対象とするが、対象学部の学生が複数回受験している英語の外部試験であるCASECのスコアを客観指標として分析項目に導入する。CASECは以下の4つのSectionから構成され、各250点（計1,000点）満点となっている。

[Section 1]

語彙の知識（空所補充／4肢択一）

[Section 2]

表現の知識（空所補充／4肢択一）

[Section 3]

リスニングでの大意把握（リスニング／4肢択一）

[Section 4]

具体情報の聞き取り能力（リスニング／書き取り）

すなわち、CASECは、TOEIC（Listening & Reading および Speaking & Writing）や実用英語技能検定のように4技能を多角的な観点や尺度で測定する試験とは異なり、語彙力・表現力・聴解力に特化しているという点は考慮しておく必要がある。本稿においては、大学での教育内容や教育効果の影響を受けていない入学前のスコアのみを対象とする。アンケートに回答していても、同試験が未受験であった学生については対象から除外した。

また、本稿では、CASECスコアにより2層に区分する。CASECのスコア・レポートでは、TOTALスコアをAA・A・B・C・D・Eの6段階にレベルを分類しているが、対象としている学生にAAおよびA以上（TOTAL 760点以上）が存在しなかったため、残った4段階をB・C（TOTAL 450点以上／n=58）とD・E（TOTAL 450点未満／n=45）に区分し、それぞれ上位層・下位層とした。

2.3. 統計処理

学部間における各技能別の連続変数の比較はMann-Whitney検定を行い、危険率は5%水準未満とした。また、英語話者の友人の数については、「いる」「いない」の2件法に集約した上で検証し、離散変数はカイ二乗検定を行った。いずれも統計処理ソフトはSPSS for Windows 25.0を使用した。

2.4. アンケートに関する倫理的配慮

本アンケート調査は、日本大学スポーツ科学部研究倫理審査（受付番号2019-011）により承認を受けており、回答に際しては、個人が特定されることがないこと、成績評価に影響を与えたり、他者に個人情報を提供したりすることのないことを明示し、同意を得ている。

3. 結果と考察

3.1. 英語に対する意識

まず、重視している技能や学修に関するニーズを分析し、体育系学生の英語に対する意識や

特徴について検討してみたい。

3.1.1. 英語4技能の重要度

図1に、4技能のうち最も重要だと思うと回答した技能の割合を示した。体育系学部において、Speaking と回答した学生は実に6割を超え、続いてListening が3割超と音声系を重視していることが明らかである。一方、文字系が最も重要であると考えている学生は非常に少なく、実数でも Reading で2名、Writing は0名であった。

表2に示される平均順位においても、1番重要であるとの回答が最多であった Speaking スコアが最も高く、Listening も0.31差で3点台にとどまった。ここでも文字系との差は歴然で、3番目の Reading と Listening との差は1.44の開きがあり、Writing は1に近い結果となった。

現在の大学1年生は、平成21(2009)年度改訂の学習指導要領に基づいて高等学校で英語を学んでいるが、この改訂では、よりコミュニケーションを重視する内容へと変更されている。各科目の名称も「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」から「コミュ

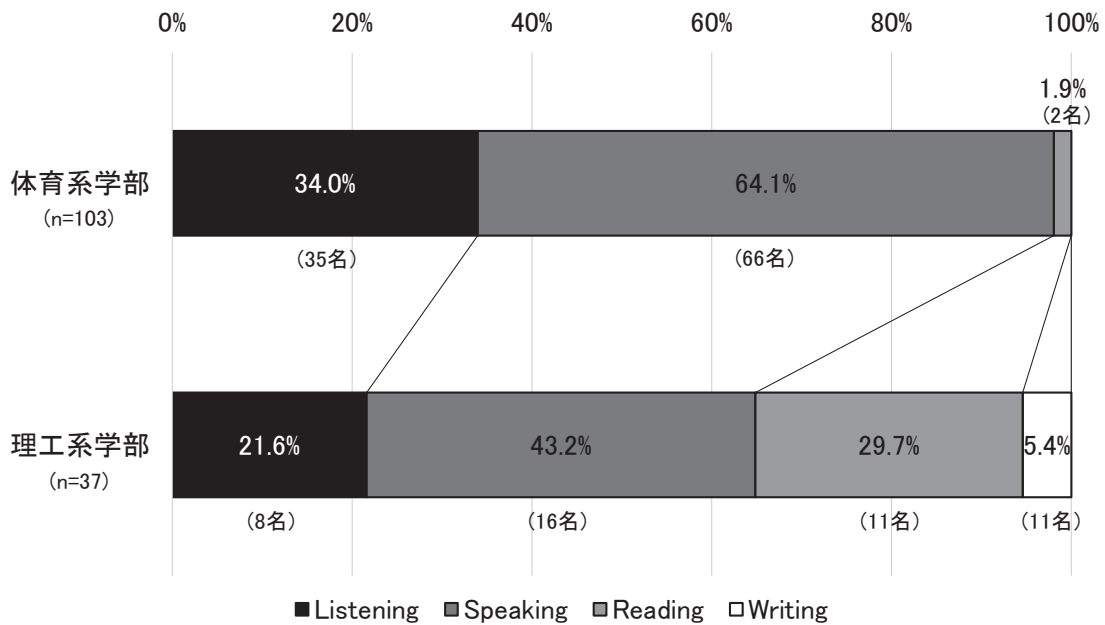


図1. 最も重要視する技能 (理工学系学部との比較)

表2. 4技能の平均順位 (理工学系学部との比較)

| | 区分 | 度数 | 平均値 | 標準偏差 | p値 ¹⁾ |
|-----------|-------|-----|------|------|------------------|
| Listening | 体育系学部 | 103 | 3.30 | 0.54 | 0.003 |
| | 理工系学部 | 37 | 2.81 | 0.91 | |
| Speaking | 体育系学部 | 103 | 3.61 | 0.56 | 0.008 |
| | 理工系学部 | 37 | 3.22 | 0.85 | |
| Reading | 体育系学部 | 103 | 1.86 | 0.54 | 0.002 |
| | 理工系学部 | 37 | 2.49 | 1.10 | |
| Writing | 体育系学部 | 103 | 1.22 | 0.44 | 0.113 |
| | 理工系学部 | 37 | 1.49 | 0.84 | |

1) Mann-Whitney検定, 危険率:5%水準未満

コミュニケーション英語 I」「コミュニケーション英語 II」に変更されており、文法については「コミュニケーションを支えるもの」として捉え、言語活動と一体的に指導することと基本方針には記されている。

本研究の結果は、そうした影響も多分に想定される。同大学の理工系学部で参考までに行った同じ調査の結果（図1および表2の下段）との比較は一考に値する。平均順位でみる限り、体育系学部と同様に音声系に重きが置かれている傾向は共通しているが、SpeakingとListeningのいずれにおいても理工系学部の方が低いポイントとなっている。また、最も重要視する技能について、理工系学部ではReadingがListeningより高い割合を示しており、平均順位の数値もあわせて考慮すれば、体育系学生よりはるかにReadingを重視しているといえる。

すなわち、ともに最も重要でないとの回答が多かったWritingをのぞいていずれも有意差が認められた点を考慮すれば、少なくとも理工系との比較においては、音声系に強くウェイトを置く一方で文字系をより重視していないという体育系の学生の意識が明らかとなった。より明確に体育系学生の特徴として結論づけるべく、今後、他の学部との比較・検討を行うこととする。

この傾向との関連がうかがえるのが、図2で提示された、コミュニケーションをとる海外の友人の数である。1人以上いると回答している体育系の学生は、全回答者の半数に近い数値となっているが、先の理工系学部では2割強にとどまっている。これは、語学系を除けば、他分野の学生にはみられない傾向ではないかと推察される。この点については表3で示されているように、2件法（英語を話す友人の有・無）に集約して行った分析においても有意差が認めら

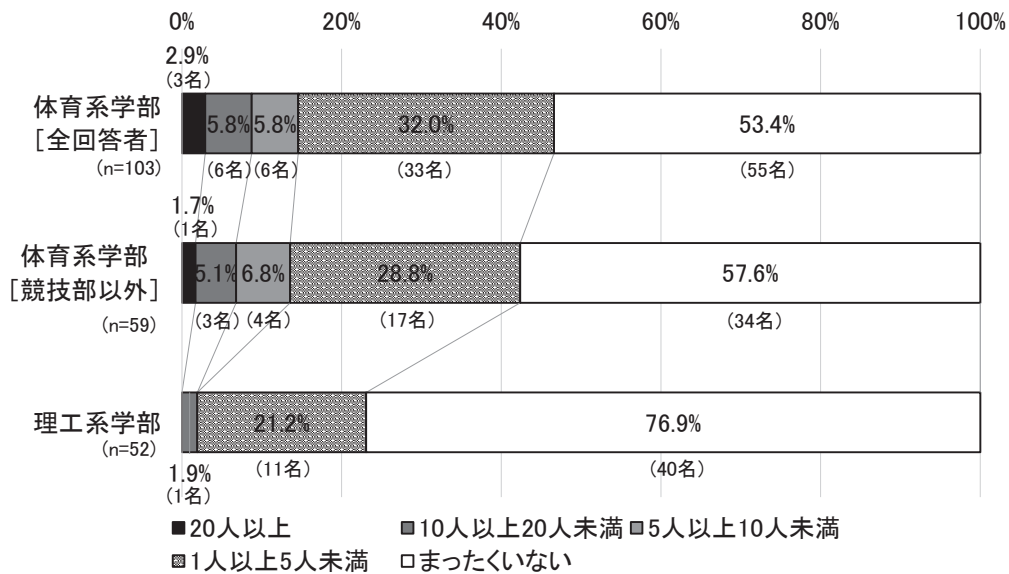


図2. 英語でコミュニケーションをとる友人の数 (理工系学部との比較)

表3. 英語でコミュニケーションをとる友人の数 (理工系学部との比較)

| 回答 | 体育系学部 | 理工系学部 | 合計 | p値 ¹⁾ |
|-----|---------------|---------------|---------------|------------------|
| いない | 55 (53.4%) | 40 (76.9%) | 95 (61.3%) | 0.005 |
| いる | 48 (46.6%) | 12 (23.1%) | 60 (38.7%) | |
| 総計 | 103 | 52 | 155 | |

1) Pearsonの χ^2 検定, 危険率:5%水準未満

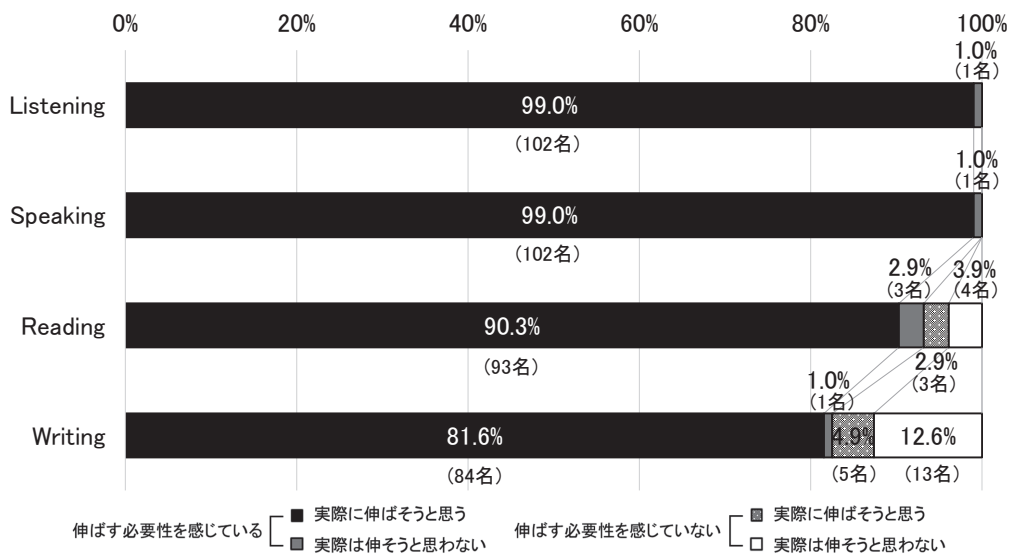


図3. 4 技能を伸ばす必要性と実際の行動

れる。しかしこの傾向は、いわゆる学生アスリー
トの数が多ければ、他の学部でも高い数値とな
る可能性がある。そこで、競技部以外の学生の
みを抽出してあわせて図示したが、ここでも4
割を超えている。今後、他学部や体育系の他大
学との比較、大学入学以前の競技歴、海外への
渡航経験等を考慮して再分析する必要があるも
の、英語を話す友人が比較的多いことは体育
系にみられる重要な特徴といえるかもしれない。
仮にそうであるならば、友人とのコミュニケー
ションを前提として、音声系への強い意識が生
じることは想像に難くない。

続いて、体育系学生が各技能について「伸ば
す必要性を感じているか」また「実際に伸ばそ
うと思うか」との問いに対して、それぞれ2件
法により回答した結果をまとめたのが図3であ
る。Listening と Speaking については回答者全
員が必要性を感じており、また1名をのぞいて
全員が実際に伸ばそうと考えていることから、
非常に高い学修動機をもっていることうかがえ
る。また、重要度が一番低いと考えられている
Writing でも、8割以上の学生が必要性を感じ
ており、動機づけや教授の方法によっては必要
性への受け止めが肯定的に変化することが期待
される。なお、Reading と Writing については、
必要性を感じてはいないものの伸ばそうとし
ている学生が一定数いる。英語科目の単位修得の

ためなどの要因が想定されるが、本質的かつ継
続的な学修動機となり得るかについては、さら
なる分析が必要であろう。

3.1.2. 大学の授業に対するニーズ

Dörnyei (2001) をはじめ、複数の研究で指摘
されているように、学習者の関心に応じた授業
をすることは、動機づけの有効なストラテジー
となると考えられる。

図4に、CASECスコアによって上位層と下
位層に区分した上で、大学の授業内で取り上げ
る必要がある(または伸ばす必要がある)と学
生が思うスキル・学修内容を図示した。グラフ
の各割合は、上位層・下位層それぞれの学生数
を分母として算出している。

上位層・下位層とも、話す力と聴く力が高い
など、4技能については前項で述べた意識の傾
向とおおよそ合致する。また、音声系の2項目
に続いていずれの層でも「語彙力」が3番目に
位置しており、音声系でも文字系でも運用上必
要であると考えたからであろうか、ニーズの高
さがうかがえる。上位層で4番目となったのは
TOEIC対策だが、上位層と下位層とでもっとも
開きのある項目でもあった(その差は▲45.3)。
下位層の35.6%がTOEIC(設問上ではTOEIC
L&R)を「知らない」と別項の設問で回答して
いることに起因すると推察されるが、就職活動

等でいまなお根強く活用されている試験であり、この点については、次項で考察するキャリアの面とあわせて検討していく必要がある。なお、望月ら(2019)も「スポーツ関連の教材を使用した場合は集中力が明らかに違う」と述べているように、体育系の大学・学部でも CLIL (Content and Language Integrated Learning) が試行されており、これを念頭にスポーツや健康といった専門に関するテーマを取り上げることにしてもたずねたが、いずれの層でも一定の関心が向けられていることが確認された。

しかし、調査したすべての項目において、上位層に比して下位層の数値が低くなっている点は看過できない。授業の内容やテーマに関わらず、相対的に下位層が学修への意欲が高くないことがうかがえる。下位層の学修意欲を授業内で高める上では、全項目の中でも数値の高い音声系を導入として用いることが効果的と考えられ、その意味では外国人教員による授業がのぞましいとも推察される。しかし、教員の組み合わせについて問うた図5の結果をみる限り、学生は必ずしもそれを望んでいないことが分かる。

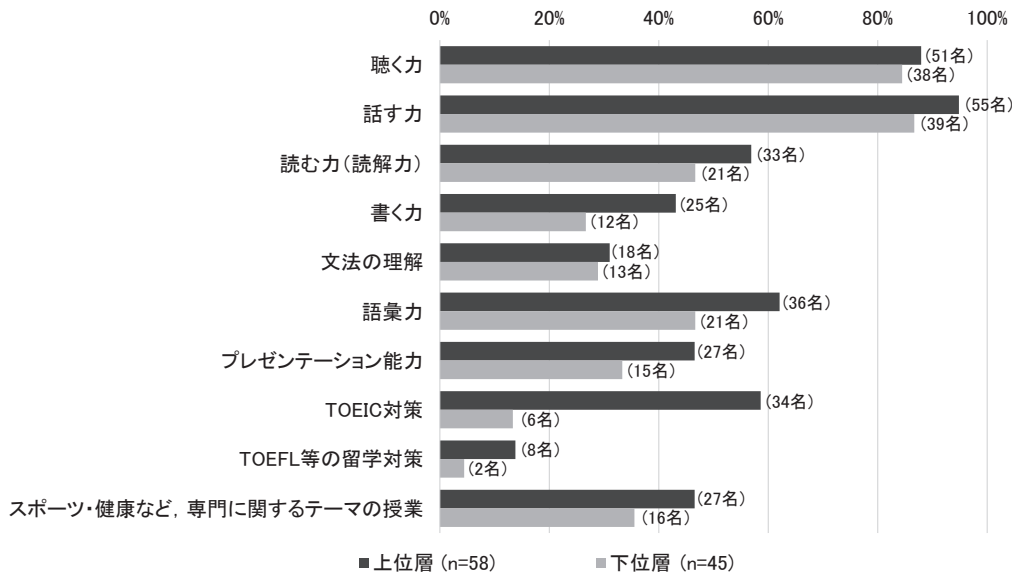


図4. 大学の授業で取り上げるべきスキル・授業内容 (階層別)

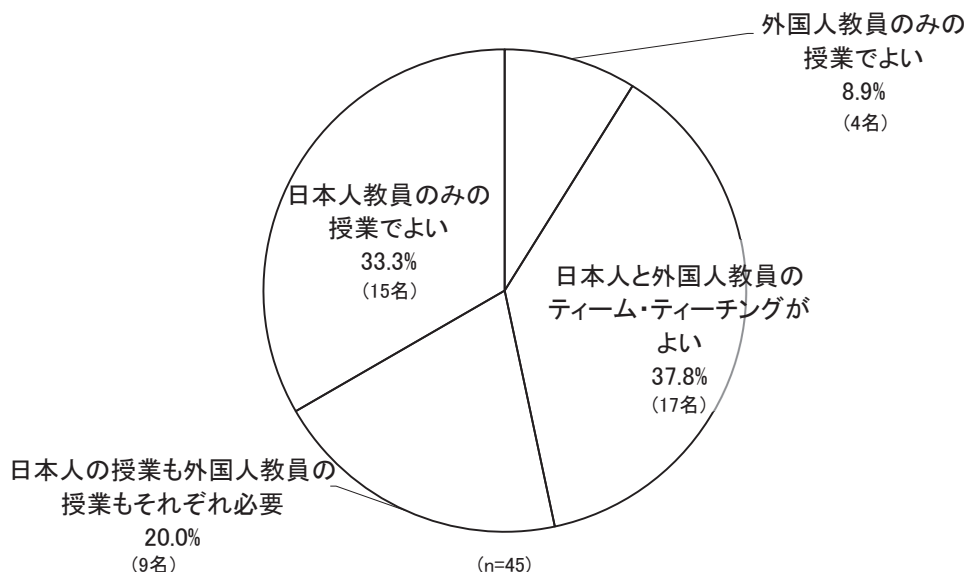


図5. 大学の授業におけるのぞましい教員の組み合わせ (下位層抽出)

英語そのものについての不安や「分からない」といった意識的ハードルが高く、音声系に対する憧れはあるものの、一方で日本人教員によるサポートを望んでいることが理由として想定される。

3.2. キャリアに関する志向と英語学修

初年次の体育系学生が、卒業後のキャリアについてどのような意識を抱いているか、またその意識が英語学修に影響を及ぼす可能性があるかについて検討する。

3.2.1. 初年次の志望キャリア

調査対象とした学部は今年度が設置4年目であり、これから初めての卒業生を社会へと送り出す新設学部である。それゆえ、学生がどのようなキャリア像を描いて入学しているかについては、就職活動の実績に依拠しているものではないことから、注目に値する。英語学修との相関や関係性を分析する前に、まずはこのキャリアの志向そのものについて個別に把握しておく。

図6は、大学卒業後（大学卒業後に専門学校等に通う場合はその卒業後）の職種・就職先に

ついての回答を示したものである。選択肢1～4をあわせた「スポーツ系」¹のキャリアを考えている学生は合計で89.3%にのぼり、非常に高い関心をもっていることがわかる。なお、学年が上がるにつれてこの値が順次減少することが2・3年生のパイロット調査結果から示されているが、この点については別の機会に論じることとする。

さて、1年生全体の志向は上述の通りであるが、これを競技における現在の所属区分から実数でみたものが図7である。「大学競技部」は、同大学が擁する34の競技部に所属している学生であり、回答者の42.7%がここに分類される。続いて総数として多いのが「学部サークル」(38.8%)で、同学部に設置されている体育系サークル²への所属者である。顕著な点をいくつか挙げるならば、いわゆる「学生アスリート」である「大学競技部」の学生は、うち38.6%が「プロの競技者」を志望しており、これが最多となっている。一方、サークル活動としてスポーツに取り組んでいる学生については、「トレーナー等の競技支援者」と「上記以外のスポーツ・健康関連業界」の志望者がそれぞれ45.0%であり、

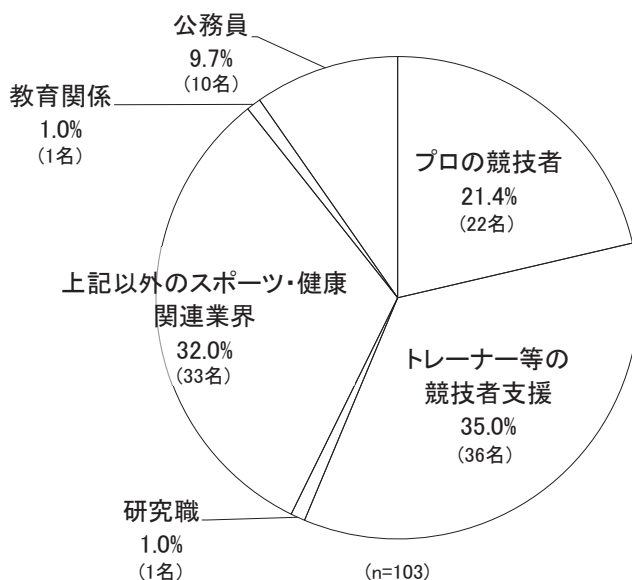


図6. 卒業後の志望キャリア

1 「5. 教育関係」について、同学部では教職課程が設置されておらず、体育の教員を想定しているかどうか不明であることから、本分析では「スポーツ系」として区分していない。

2 同学部のキャンパスには2つの学部が共存していることから、正確には2学部合同の体育系サークルである。

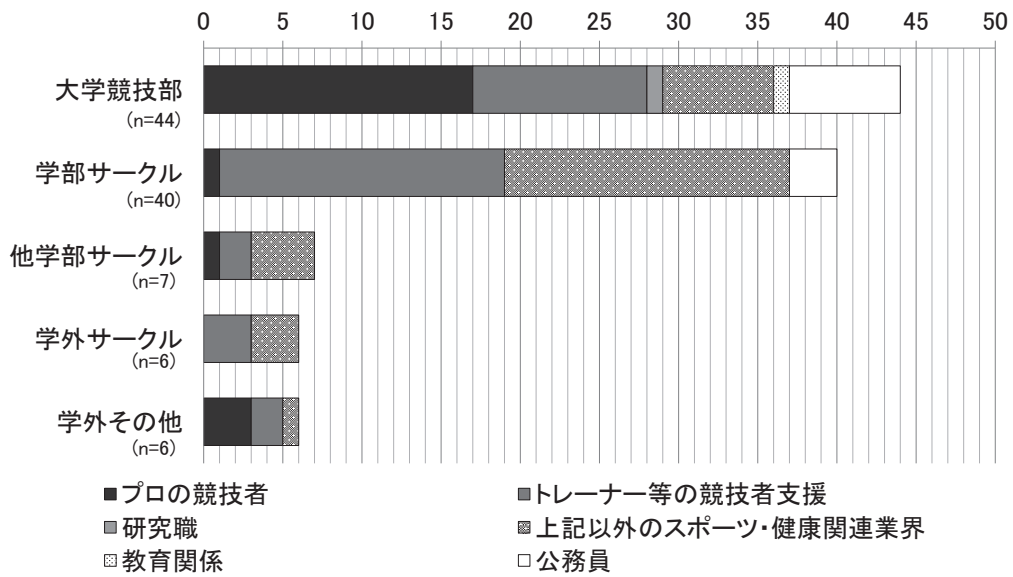


図7. 所属する競技団体区分と志望キャリア (実数)

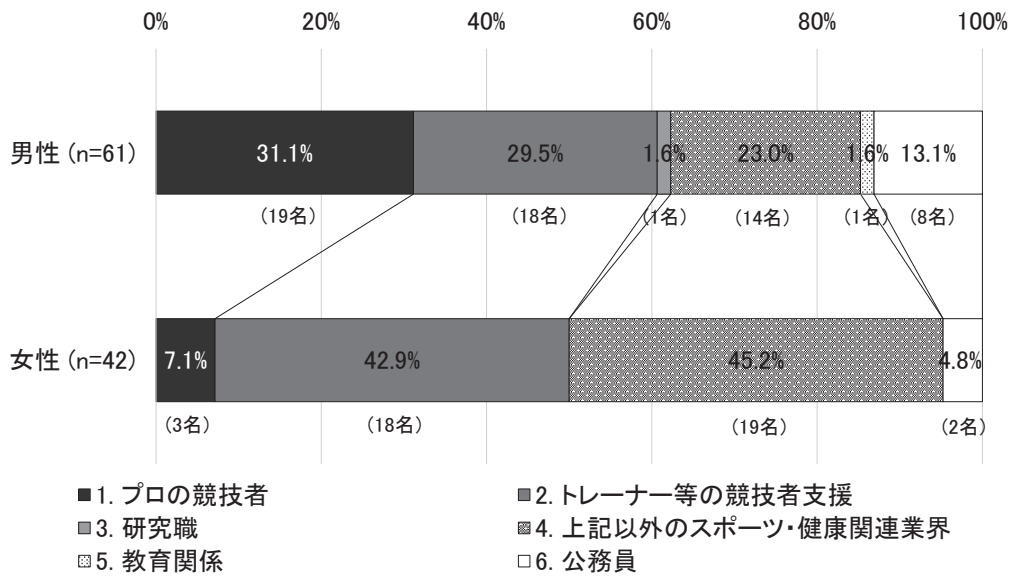


図8. 卒業後の志望キャリアと性別

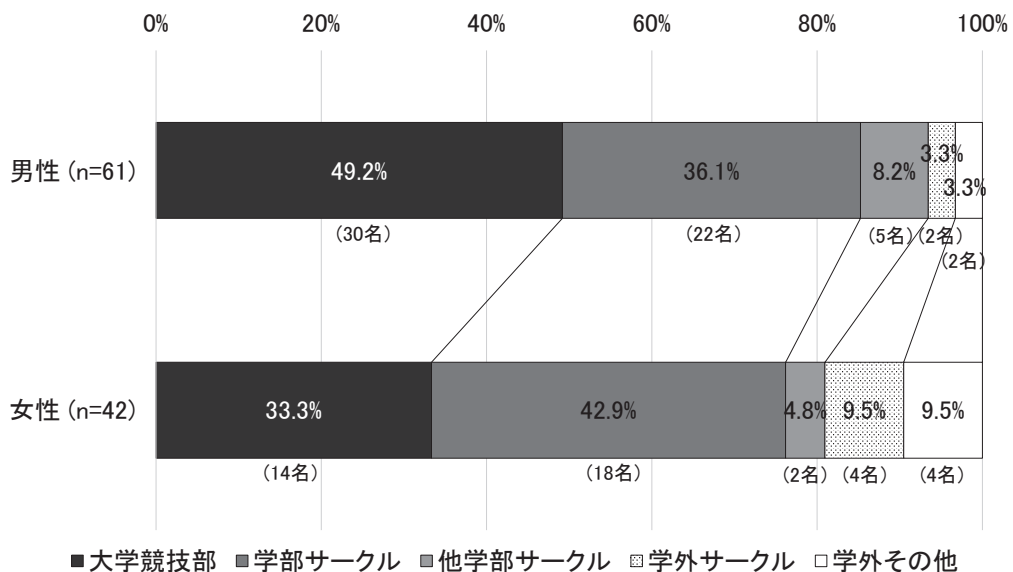


図9. 性別ごとにみた所属する競技団体の区分

競技の周辺領域でのキャリアを中心に考えている。なお、「学外その他」においても「プロの競技者」が最も多いが、これは個人等で国際大会に出場している学生やスポンサー契約をしている学生を含んでいることによる。

つづいて、性別による相違を確認しておきたい(図8)。特徴的なのは「プロの競技者」で、男子学生では31.1%と最多の値を示している一方、女子学生ではわずか7.1%にとどまっている。競技部に所属している学生で「プロの競技者」を志望している割合が高いことは上述の通りだが、男子学生ほどではないものの、女子学生も回答者の3分の1が競技部に所属していることは見逃せない(図9)。大学生の将来像を分析した上野(2012)は、短期大学の女子学生との比較を前提とした上で、四年制大学の女子学生が抱く将来像は男子大学生に近いと指摘しているが、本稿で対象としている体育系の学生については、ここで示された比率から判断する限り、結果が異なるようにも推測される。この点については、母数が増えた時点であらためて分析し、解析を行うこととするが、大学を卒業した女性アスリートを支援する体制が整備の途上であり、組織的にも環境的にも男性とはいまなお差異があるという小笠原(2013)の指摘と通底する。

3.2.2. キャリアへの意識と英語に対する意識

キャリアへの意識と英語への意識には何らかの関係性がみられるのであろうか。ここでは「プロの競技者」を志望している学生を例として検討する。

図10は、就職活動や進学準備において英語のスキルを身につけたいかを調査したものである。全体では95.1%が「身につけたい」と回答しているものの、「プロの競技者」を志望している学生では「身につけたいと思わない」が2割弱となっている。

ここであらためて、前章で言及した授業での「TOEIC対策」へのニーズについて、志望キャリアを参照しながら考察してみたい(図11)。なお、対象学生数がそれぞれ1名であった「研究職」と「教育関係」はのぞいて示している。他の3つの群が4割を超えている中で、「プロの競技者」は1割に満たない学生のみが「TOEIC対策」を希望している。この最大の理由は、TOEICそのものへの認知度が影響していると考えられる。必ずしもTOEICが英語力の絶対的な指標ではないのだが、「プロの競技者」を志望する学生の54.5%がTOEICを「知らない」と回答しており、これは「知らない」とした1年生の総数の46.2%を占める。実際に就職活動等でTOEICスコアを使用するかどうかは

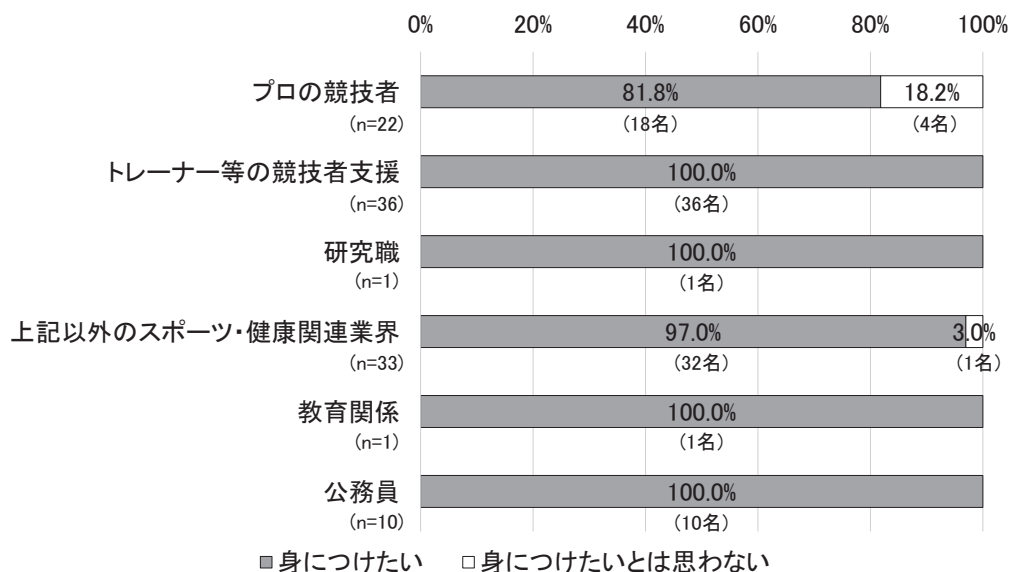


図10. 志望キャリアごとにみた就職活動等に向けた英語修得の意思

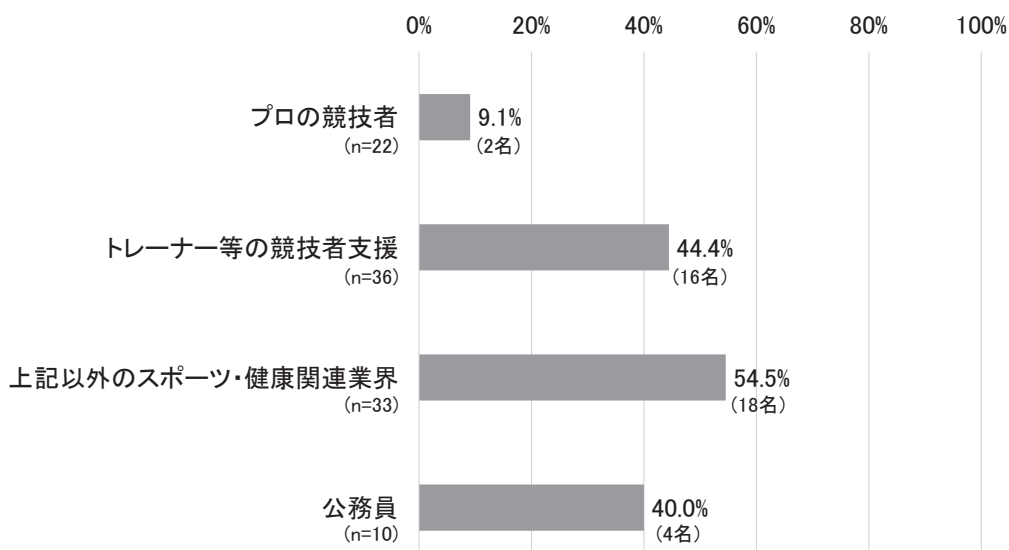


図 11. 志望キャリアごとにみた TOEIC 対策へのニーズ

別としても、社会での活用状況を考えれば、英語学修の指標やキャリア形成における目標設定において役割を果たすことは大学生として知っていてもよいだろう。

このように考えると、「プロの競技者」を志望している学生は、在学中に英語を修得する必要性を感じていないようにみえるのだが、先の表 2 で集計した「実際に伸ばそうと思うか」の問いを「プロの競技者」に絞った数値でみる限り、4 技能のいずれに対しても「思う」と回答した学生が大多数を占めている。すなわち、英語をプロの競技者となる直接的な要件としては考えていない、あるいは、競技に集中してプロという目標一点に向かって進んでいることからいわゆる一般的な「就職活動や進学準備」への意識が高くないということが、図 10 の結果の一因と推定される。

しかし、実際の学力を考慮すると、「プロの競技者」と回答した学生のうち、入学時の CASEC スコアにおける上位層は 27.3% であり、7 割以上が下位層である。冒頭で述べたように、競技レベルが上がり、国際舞台で活躍することともなれば、少なからず英語の必要性は高まってくるであろう。福井ら (2014) は、「大学生アスリートにとってスポーツ活動に関わる場面で不安を抱くことは、心理的競技能力、特に精神の安定や集中への阻害要

因と成り得る可能性が示唆された」と論じているが、英語を修得することは、海外での競技内外の不安を取りのぞく要因としても期待される。その意味で、競技への意識が高い学生の学修意欲を向上し、成果をどのように構築するかは、重要な課題といえよう。

4. 残された課題と今後の展開

冒頭でも言及したように、本稿は学生の「キャリア・トランジション」と英語学修との関係性を解き明かす上でのパイロットであり、本研究全体においては序章に過ぎない。

現時点ではいくつかの課題が残されているが、特に、回答期間内に当該大学のアカウントを経由して Google Form にログインすることができなかった学生が多数おり、当初の想定より回答者数が少なかった点は非常に大きい。結果として、1～2 名の差異で左右されていると推察される項目も散見され、本稿では取り上げることは控えた。こうした状況もあり、本稿ではデータの集計が中心となったが、今後もデータ収集を継続し、次報では、統計解析による詳細な結果を提示しながら論じていく。

また、望月ら (2019) は、体育系の学生にみられる自己効力感の高さを調査結果から明らかにしており、齊藤ら (2011) も、「向上心」

や「挑戦欲」の項において、体育系の学生は非体育系の学生よりも高い数値を示している。しかし、このような競技者ならではの特性をあわせて検討することは非常に大きな意味がある。そうした価値意識においても、やはり学年の推移やキャリアへの意識は少なからず影響があると考えられることから、調査項目の追加や実施方法についても検討していきたい。

本稿では紙幅の都合で取り上げられなかったが、本アンケートでも調査項目とした競技レベルや国際大会への出場経験、競技区分（個人競技か団体競技か）などの要素によっても特性や値の変化がみられると推察されることから、スポーツ特有の因子をふまえつつ、キャリア・トランジションに連動した推移を把握することで、より学生の実情にあった指導やカリキュラム構築が可能になり、ひいては相応の学修成果も生むことが可能になるといえる。

5. 結語

本稿では、初年次の体育系学生における英語への意識や学力の現況を、先行研究では検討されていないキャリアという概念を導入しながら、集計データの考察を中心に概観してきた。

4技能については、音声系、特にアウトプットである **Speaking** への意識が非常に高く、文字系への意識は総じて低いといえる。この点は、英語話者の友人をもつ学生が多いという特徴も影響していると推察される。その一方で、音声系のみならず文字系についても、修得の必要性や伸ばそうという姿勢は強くみられた。

また、CASEC スコアから学力層を2つに分類し、授業へのニーズを検討した結果、4技能についての傾向は音声系が高く文字系が低いという点で同じであったが、顕著に差異が認められたのは TOEIC 対策であった。ス

ポーツ・健康などの専門分野や周辺領域をテーマとする授業にも、一定の関心が向けられていることが分かった。

キャリアについては、9割弱がスポーツ系志望であった。プロの競技者を志望している学生は全体の2割程度だが、性別でみると、男子学生が3割を超えている一方、女子学生は1割に満たなかった。この点については、社会的な要因もあると推察される。プロの競技者を志望している学生にとって、キャリアを拓く上で英語を身につけたいと考えている割合は他の区分よりも目立って低く、殊に就職活動等で広く指標として導入されている TOEIC については、「知らない」と回答した学生が 45.2% にも上った。これは、英語が得意でない層が多いことも原因と考えられるが、4技能のいずれについても伸ばそうという姿勢そのものは強くみられることから、競技への意識の高さに比例した学修意欲の向上や学修成果の構築がのぞまれる。

参考文献

183-196.

-
- ディビット・エルメス「Report on the 2013 JUTEN Project: スポーツ競技関連の英語教材の作成」『鹿屋体育大学学術研究紀要』第 50 号 (2015) : 31-49.
- Dörnyei, Zoltán. *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- 福井邦宗・土屋裕睦・豊田則成「大学生アスリートにおける不安と実力発揮の関係——特性不安と心理的競技能力に着目して」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』第 11 号 (2014) : 71-77.
- 煙山千尋・清水安夫・茂木俊彦「スポーツ選手に対するメンタル・トレーニングの現状と課題——効果的な方法論の構築を目指して——」神奈川体育学会『体育研究』第 42 号 (2009) : 1-8.
- 望月好恵・前川直也・立山利治「体育系大学における学生の英語学習に対する意識調査と英語学習の動機づけ強化に関する一研究」『国際武道大学紀要』第 30 号 (2014) : 49-60.
- 望月好恵・壁谷一広・大和久吏恵・鈴木政浩「体育系学部の学生に効果的な英語授業の特性——質問紙調査と授業実践の分析にもとづいて——」『リメディアル教育研究』第 13 巻 (2019) : 5-21.
- 室伏広治「アスリートと外国語」『日本語教育』165 号 (2016) : 44-49.
- 小笠原悦子監修『女性アスリート戦略的強化支援方策レポート』順天堂大学, 2013.
- 齊藤隆志・久保健助・高橋進・影山陽子「体育系大学生のキャリア学習支援プログラムに関する研究 (第一報) ——学習初期段階におけるキャリア価値意識」『日本女子体育大学スポーツトレーニングセンター紀要』第 14 号 (2011) : 1-11.
- 田中久子「体育大学における英語教育——仙台大学——」『仙台大学紀要』第 17 集 (1985) : 65-82.
- 上野淳子「ジェンダーおよび学歴による将来像の違い」『四天王寺大学紀要』第 54 号 (2012) :